

胃瘻カテーテル経皮挿入不能例に対する再胃瘻造設の検討 — 残存瘻孔を利用した非観血的カテーテル設置法 —

ふきあげ内科胃腸科クリニック 蟹江 治郎
医療法人さわらび会 福祉村病院 赤津 裕康

目 的

何らかの理由で、胃瘻カテーテルの経皮的挿入が行えなくなった症例に対する、外科的侵襲を伴わない、残存瘻孔を利用した非観血的カテーテル設置を行い、その達成率と有効性についての検討.



対 象

PEGを行い瘻孔が完成した後にもかかわらず、
経皮的にカテーテルの挿入が行えなかった症例

非観血的カテーテル設置の考案以前の症例
瘻孔拡張による栄養剤リークの症例 は除く

内訳

事故抜去後瘻孔狭窄 10名

腹腔内誤挿入による経皮挿入不能例 6名

一週間以上の胃瘻カテーテル抜去による瘻孔閉鎖例 5名

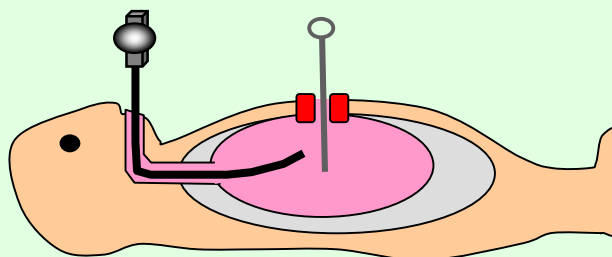
定期交換時挿入不能例 4名

計 25 名

カテーテル挿入不能の狭窄瘻孔へのカテーテル設置法(狭窄瘻孔を温存したPEG再造設)

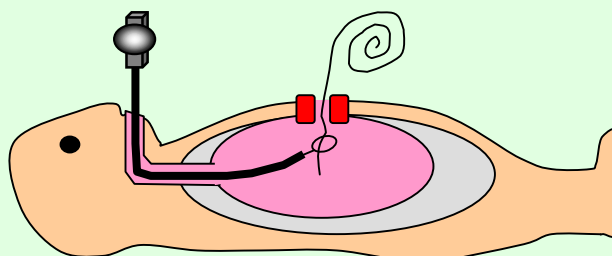
瘻孔から細径プジーを挿入

内視鏡観察下にて既存の瘻孔へ細径プジーの挿入を試み、瘻孔の交通が遮断していないかを確認



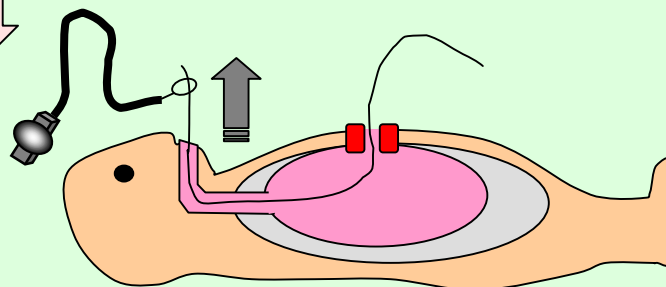
瘻孔からガイドワイヤー挿入

既存の瘻孔の交通が確認されたら、Pull式 PEG造設用のガイドワイヤーを挿入し、内視鏡で把持する



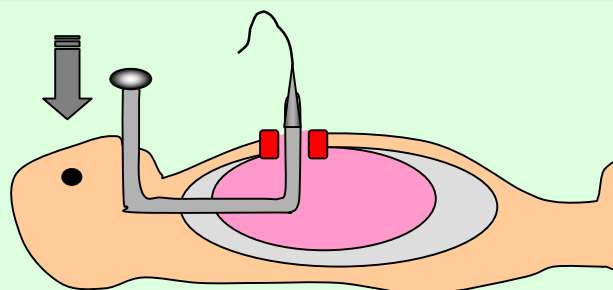
ガイドワイヤーの導出

ガイドワイヤーを把持したまま内視鏡を抜去して、瘻孔から挿入されたワイヤーを口腔から導出。



PEGチューブを挿入

Pull式 PEG造設の手技と同様に、ガイドワイヤーを利用しつつPEG造設用チューブを挿入。瘻孔は温存される。

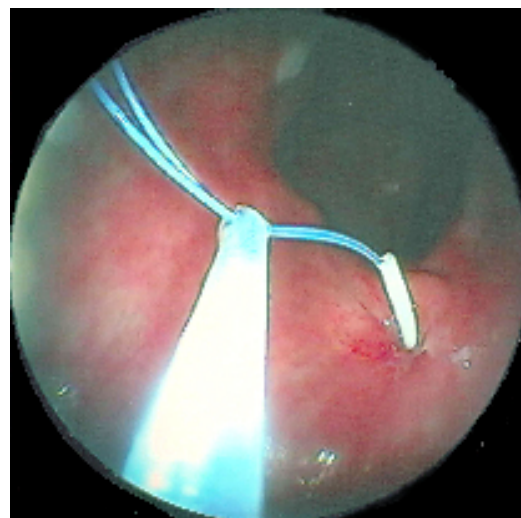
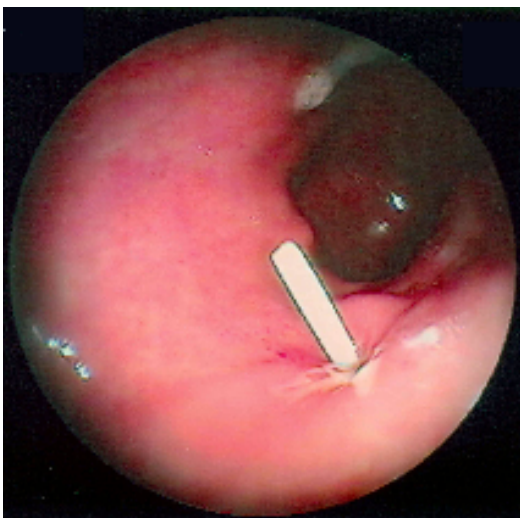
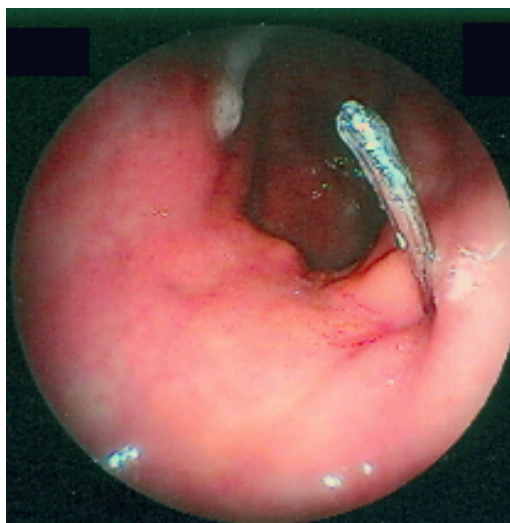
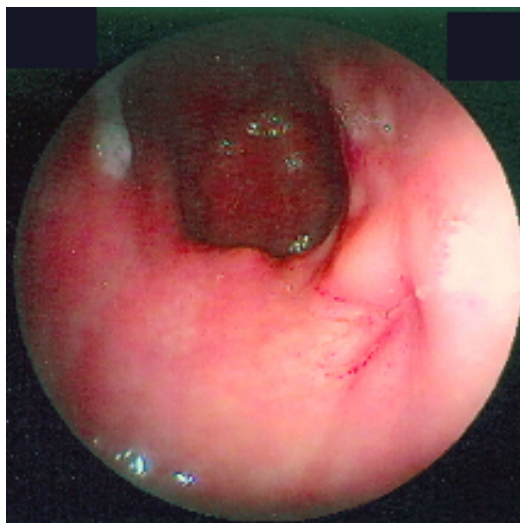


引用：
蟹江治郎 著
再挿入不能（瘻孔完成後）
胃瘻PEGハンドブック
p67-71 医学書院 2002.

症 例

78歳 女性

PEGカテーテル抜去7ヶ月後の再挿入例



内視鏡下に瘻孔部分を観察



体表よりプジーを挿入し
瘻孔の開存を確認

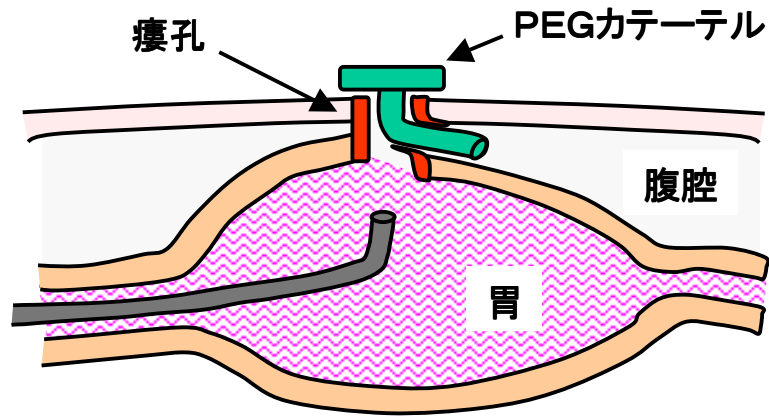


Pull式PEG用の
穿刺針外筒を挿入

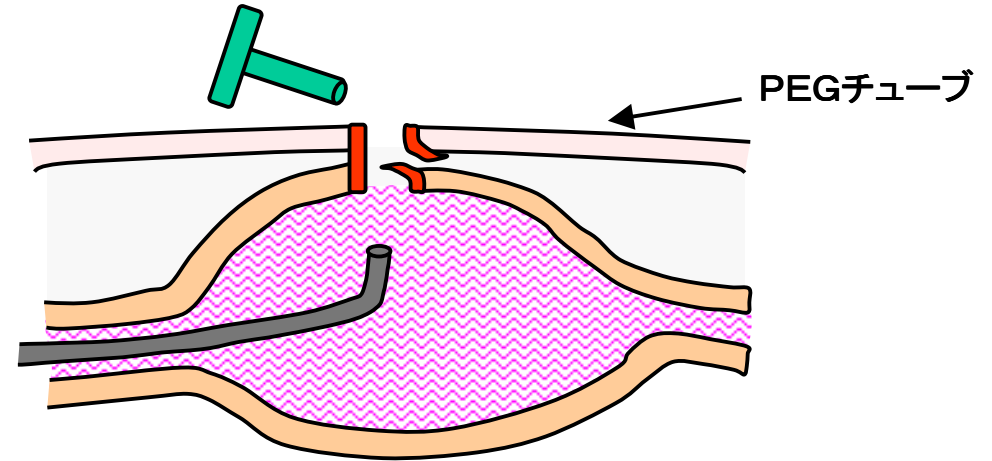


外筒よりPEG用の
ループワイヤーを挿入し
経口的にカテーテルを挿入

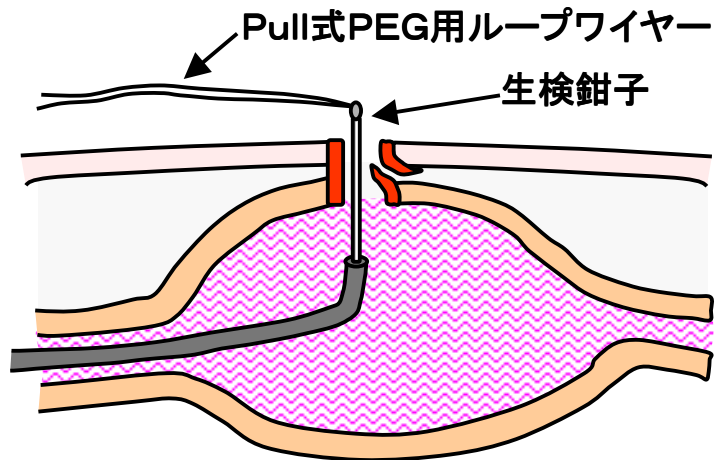
腹腔内誤挿入例に対しての再挿入



内視鏡を利用して瘻孔部を確認

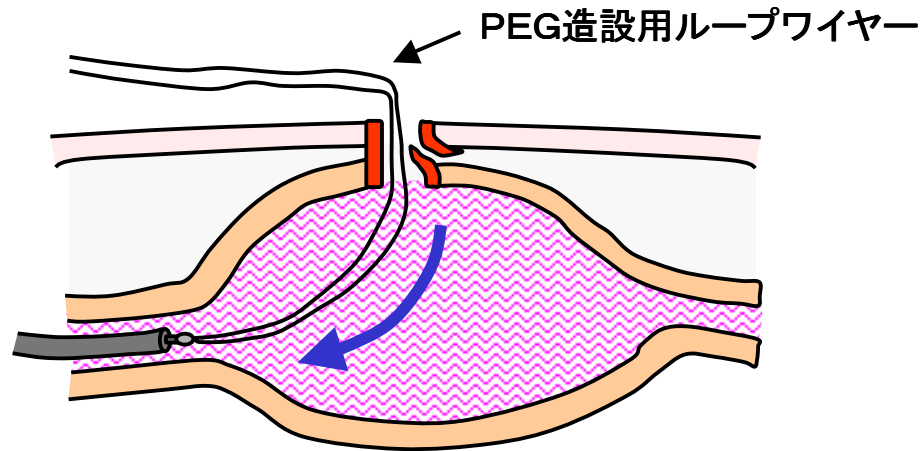


誤挿入が確認されるまで抜去は行わず、
内視鏡で確実に確認した後にカテーテルを抜去

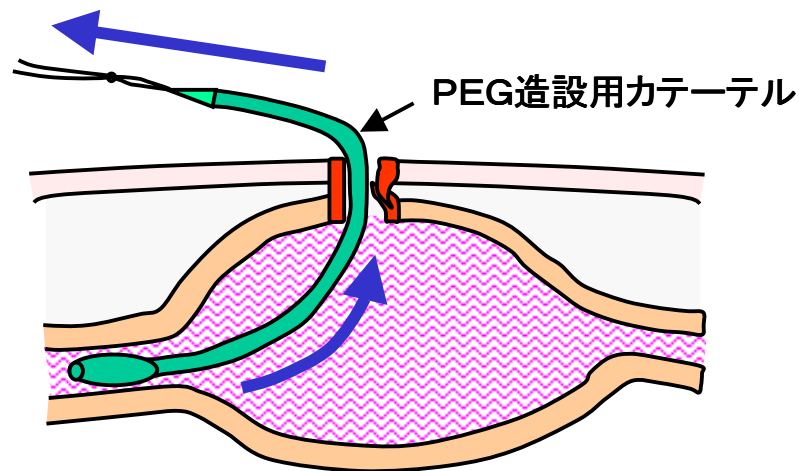


瘻孔部分から慎重に生検鉗子を挿入して、
先端を体表面に出しPEG用ループワイヤーを把持.

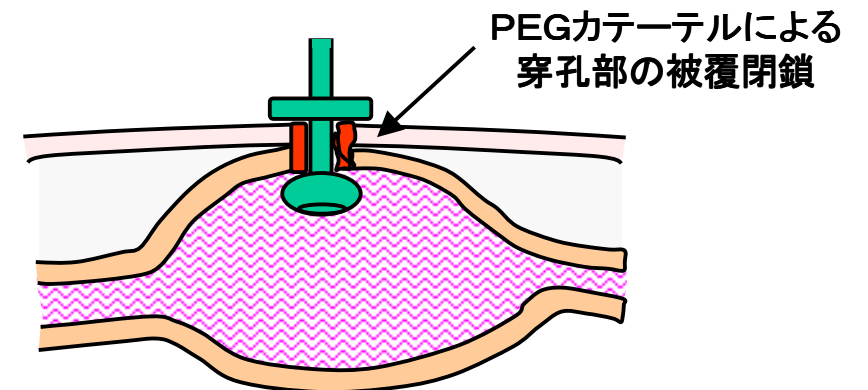




ループワイヤーを把持しつつ内視鏡を抜去することにより、
破損穿孔した瘻孔を経由し、口腔より体外へ誘導する。



口腔へ誘導したループワイヤーとPEG造設用カテーテルを結紮し、
ガイドワイヤーの牽引を行うに事によりカテーテルを挿入



PEGカテーテルは胃内減圧用チューブとして利用



結 果

全対象症例 (n=25)

非観血的胃瘻カテーテル設置	可 能	21名(84%)
	不可能	4名(16%)

一週間以上カテーテル抜去による瘻孔閉鎖例 (n=5)

非観血的胃瘻カテーテル設置	可 能	4名(80%)
	不可能	1名(20%)

結 語



瘻孔完成後にもかかわらず，カテーテルの
経皮挿入が不能となった症例に対する，
非観血的カテーテル設置法は，
低侵襲かつ有効な方法である．

本法はカテーテルの長期間抜去により，
一見閉鎖した状態にある瘻孔においても，
多くの症例は瘻孔管腔が保たれていることから，
その実施が可能である．